舌腺の導管由来と思われる角化物を充満した偽嚢胞の1例

中 島 健・野代忠宏・古田治彦・原 巖

Keratin-filled pseudocyst on the ventral surface of the tongue suggesting ducts of lingual gland origin

Takeshi NAKASHIMA・Tadahiro NODAI・Haruhiko FURUTA・Iwao HARA

Abstract: A 10-month-old girl was referred to our hospital for a mass on the ventral surface of the tongue. The mass was removed surgically.

Histopathological examination of the lesion indicated an "epidermoid cyst" in some sections. However, the cyst wall was continuous with the epithelium of the ventral surface of the tongue, and the multiple-layered squamous epithelium cells of the wall contained goblet cells. In addition there were abundant minor salivary glands and excretory ducts around this lesion. The lesion was diagnosed as a keratin-filled pseudocyst arising in the excretory ducts of the minor salivary gland.

Key words: keratin-filled pseudocyst (角化物を充満した偽嚢胞), tongue (舌), oral cavity (口腔)

結 言

小唾液腺の導管の損傷により粘液嚢胞が発現することはしばしばみられるが、導管上皮由来の嚢胞はまれである。今回、われわれは乳児の舌下面に発現した導管上皮の角化物を充満した偽嚢胞で、一部切片に類表皮嚢胞の所見をみた1例を経験したので報告する。

症 例

患 者：10か月 女児。

初 診：平成4年4月■日。

主 訴：右側舌下面部の腫瘍。

家族歴・既往歴：特記事項なし。

現病歴：2週間前の検診時に右側舌下面の腫瘍を指摘され、精査を希望して当科を受診した。

現 症

全身所見：体格は中等度で、全身状態ならびに栄養状態は良好であった。

口腔内所見：舌下面、舌小帯右側に直径4mm、黄白色、球形の腫瘍を認めた(写真1)。硬度は弾性軟であ

写真1 舌下面の腫瘍

った。また、舌小帯の強直症がみられた。

臨床診断：舌下面類表皮嚢胞。

処置および経過：平成4年4月■日に当科入院の上、諸検査を行った後、全身麻酔下に摘出術を施行した。腫瘍は容易に摘出され、1次閉鎖を行った。同時に舌小帯伸張術を行った。術後6か月現在、経過は良好である。

摘出物所見：摘出物は4×4×3mm大で、内容物は乳白色のクリーム状であった。

病理組織所見：偽嚢胞の壁は重層扁平上皮からなり、内壁には錯角化がみられ、内腔には角化物が充満していた(写真2)。上皮の一部には粘液杯細胞が散在しており、壁と舌粘膜の連続が観察された(写真3)。また、周囲固有層内には粘液腺とその導管が散在していた(写真3, 4)。

病理組織診断：舌腺の導管由来の角化物を充満した偽

九州歯科大学口腔外科学第1講座

(主任代行：亀山嘉光助教授)

The First Department of Oral Surgery, Kyushu Dental College (Acting Chief: Associate Prof. Yoshimitsu Kameyama)

受付日：平成4年10月19日

写真2 摘出物の全割病理組織写真(右下に粘液杯細胞がみられる)

写真3 切片の一部に内壁と舌粘膜の連続性が観察される。

嚢胞。

考 察

舌下面には前舌腺、ならびに副前舌腺の導管が開口している¹⁾。それらの部位に粘液嚢胞が発現することは日常臨床よく遭遇する。これらの小唾液腺由来の粘液嚢胞は一般に嚢胞上皮を持たないものが多く、その主な成因として導管の損傷が考えられており、導管が閉塞し導管の拡張を成因とするものは少ない²⁾。

小田島ら³⁾は上唇に発生し、導管上皮の過形成とその粘液細胞の分泌する粘液様物質により、導管が拡張した多彩な組織像を示した粘液嚢胞の1例を報告している。嚢胞壁は2層構造を呈し、内層は円柱細胞や杯細胞、外層は立方あるいは多角形の細胞で構成されていた。これに対し、本症例は導管上皮の角化により導管が拡張し内腔に角化物を充満したきわめてまれな組織像を呈していた。また、上皮が角化した重層扁平上皮であり類表皮嚢胞が疑われたが、連続切片の詳細な観察の結果、①一部の壁に、粘液杯細胞が認められた。②嚢胞壁と舌下面粘膜の上皮の連続性が認められた。③嚢胞周囲に、舌腺とその導管が豊富に認められた。このため、舌腺の導管由来の角化物を充満した偽嚢胞と診断した。

Sewerin ら⁴⁾は下唇粘膜の皮脂腺の導管由来の角化物を充満した偽嚢胞の1例を報告している。彼らは切片の一部に“類表皮嚢胞”と考えられる所見がみられたこと

写真4 周囲組織内には小唾液腺とその導管が豊富にみられる。

より、連続切片を注意深く観察し、周囲組織との関係をきわめ正しい診断を下すことが重要であると述べている。また、過去に報告されている類表皮嚢胞の一部には同様のものが含まれている可能性について述べている。

われわれが渉猟できた口底部を含まない舌下面に発現した類表皮嚢胞の報告は、わずかに5例であった。それらは正中線上には存在せず、唾液腺組織の豊富な部位に存在していた。その成因に関して、報告中には外傷の既往の記述は認められない。Goldberg⁵⁾ならびに杉本ら⁶⁾はその成因については触れていない。中島ら⁷⁾は先天的な原因をあげ、黒川ら⁸⁾、関ら⁹⁾は先天的原因より後天的原因ではないかと推測しているが、それらの根拠については曖昧である。また、連続切片製作の記述はすべての報告で認められなかった。年齢は22歳より47歳に分布し、病理組織学的に全例が壁が重層扁平上皮からなる類表皮嚢胞であった。本症例は年齢が1歳未満と若い点を除き、発現部位、臨床所見、病理組織所見ともにこれらの類表皮嚢胞に類似しており、このような偽嚢胞が嚢胞化して類表皮嚢胞を形成する可能性が示唆された。またこのような場合、連続切片による確実な診断が必要不可欠であると考えられた。

舌下面以外にも小唾液腺ならびにその導管の存在する頬粘膜、口唇粘膜¹⁰⁾、口唇垂¹¹⁾などにも類表皮嚢胞が発現することがある。これらの類表皮嚢胞の成因のひとつに、唾液腺導管の壁の角化亢進による嚢胞化の可能性が示唆された。

結 語

われわれは、乳児の舌下面に発現した粘液腺の導管の拡張と考えられた角化物を充満した偽嚢胞で一部切片に類表皮嚢胞の所見をみた1例を経験したので報告した。

引用文献

- 1) 上條雍彦：口腔解剖学内臓学。第1版，フナトーム社，東京，1968，1452-1454頁。
- 2) 小澤孝紀，水野明夫，他：小児唾液腺停滞嚢胞の検討。口科誌 36: 138-144 1987。
- 3) 小田島哲世，奥山富三：上唇に発生し，多彩

- な組織像を示した粘液嚢胞の一例. 口科誌 28: 333-335 1979.
- 4) Sewerin I., and Prætorius, F.: Keratin-filled pseudocysts of ducts of sebaceous glands in the vermillion border of the lip. J Oral Path 3: 279-283 1974.
 - 5) Goldberg, A.F.: Dermoid cyst of Tongue, Report of case. J Oral Surg 23: 649 1965.
 - 6) 杉本浩志, 埜口五十雄, 他: 舌下面に発生した類表皮嚢胞の1例. 日口外誌 38: 1233 1992.
 - 7) 中島 健, 喜久田利弘, 他: 比較的まれな部位に発現した類表皮嚢胞の3例—成因および文献的考察—. 九州歯会誌 45: 517-524 1991.
 - 8) 黒川英雄, 姫田東高, 他: 舌小帯に発現した類表皮嚢胞の1症例. 日口外誌 33: 1655-1666 1987.
 - 9) 関 豊, 田川俊郎, 他: 舌下面に発生した類表皮嚢胞の1症例ならびに本邦における文献的考察. 日口外誌 36: 654-657 1990.
 - 10) 武富晶子, 杉本忠雄, 他: 上唇に発現した類皮嚢胞の1例. 日口外誌 37: 1191-1192 1991.
 - 11) 中島 健, 喜久田利弘, 他: 口蓋垂に発現した類表皮嚢胞の1例. 日口外誌 37: 1868-1869 1991.